2011 年支援活動ドキュメント

―ここでは、当時作成、使用した資料の一部を掲載し、「現場を再現」する―

３月１１日　―東日本大震災発生。

６月２５日（土）―支援要請受ける。

友人 A より「夏服不足。友人などに声をかけ、宮城県内陸部のボランティア宅へ持参して欲しい」との電話要請

６月２７日（火）―支援要請メール発信

ＰＣメールで、友人３０人ほどに「夏服を段ボールで自宅へ送付」を以下要請。

【最初の支援要請メール】

「友人・知人の皆様

―昨日、ボランティアで活動している親しい友人より緊急で、要請あり、以下について、皆様のお力を頂きたい、とのお願いです。

主旨―私の家に以下①②を段ボールで集約し、取りあえず７月４日の週に、私の車で、宮城県の被災地支援拠点へ届けます。（緊急なので、いったん、短期間集約しますが、但し、長期的な取り組みになるので、遅くなっても構いません）

①「汚れていない夏物衣類（ボロ着は駄目）」

②「フライパン、鍋、まな板、包丁など調理器具」

にひとまず限定し、段ボールに、内容物を書いて、以下にお送り頂ければ、幸いです。

〒351-　　朝霞市　　齋藤　大介

なるべく、広い世代のニーズに少しでも答えるため、様々な年代の友人の皆様に声をかけさせて頂きました。おそらく、どれだけあっても、足りないでしょう。普段暮らしの私だって、自分用が足りず、安い夏衣類、買いたしたばかり。まして、全てを失った方々、援助金も給与もままならず、買いにゆく店すらほとんどない。但し、もちろん、新品、をわざわざ買ってまでは、と思いますので、無理のない範囲、で宜しくお願いします。

友人曰く、「一度、現地に行きなさい。出来れば、子供と一緒に。テレビなんかで見るのと、大違い。私は、帰ってから、余りの衝撃で、暫く、心にぽっかり穴があいて、何も手に付かない日が続いた。ホントに何にもない。ボランティアの数も減ってきているし、他人を頼らず、大介が集約して、大介の車で、直接運んでほしい。」

もし、ご自分の家には、上記①、②が無くても、皆様の友人、知人で、本件協力頂く方の輪が広がれば、幸いです。また、同行、歓迎です。

なお、今回のアクションは、特定の団体、宗教、政党などに属するものではなく、全くの個人同士のリレーションシップです。」

７月１５（金），１６日（土）―支援物資、初搬送

先のメールを見て、友人・知人から自宅に届いた段ボール７０箱（衣類８２０着以上、生活用品６２０個以上、調理器具２８０個以上、総計１７００を超える品々）の半分をマイカー（７人乗り）に満載、友人Ａとともに宮城県内陸部、大崎市のボランティア宅へ搬送。すると、この支援物資は、２６日に海岸線の亘理町で被災者に配布する「さざんか広場」で使うので、当日は、残り半分の支援物資と共に、手伝いの人手も欲しい、と言われ、亘理町「さざんか広場」への参加のきっかけとなる。この時点で、現金５万３千円ものカンパも。

【現地レポート】

15 日（金）現地支援者宅へ搬入

７時―前日に、今回、当初の要望だった「夏物衣料」（男・女・子供・下着・タオルなど）、段ボール 30 個を７名乗りのオデッセイ後部座席に積み、出発。「今回の仲介役の大学時代からの友人」をピックアップ。外環道、東北自動車道仙台南ＩＣ、仙台南部道路経由で、

11 時半―「仙台空港」。ヘルメット姿の工事関係者ばかりが目につく、モダンな大きな空港施設は、外見は、砂も取り除かれ、これまで通り、のよう。でも、入れるのは、１階のごくわずかな部分。一部の小さなスペースのみで発着業務再開。２０人ぐらいの乗客が、待合スペースで待機。40 度近い？ベニヤ張りの仮設トイレで、用を済ます。

小さな土産物コーナーのみ、レストラン無し。ＪＡＬ、ＡＮＡの仮設受付カウンター周辺は、励ましの寄せ書き、折鶴。ＡＮＡは９便、札幌、名古屋、大阪、福岡へ。ＪＡＬは、６便、札幌、伊丹、福岡へ。どちらも、ほぼ満席。

「空港、というより、小さな離島のセスナ機が発着する飛行場、の感じ。」空港周辺を車で巡回。大木が根こそぎ倒れ、路肩のコンクリートが壊れ、点在する施設やレストランは、外観を残してはいるものの、完全に打ち抜かれ、大きな水たまりがあちこち。「国土交通省」を表示したダンプが行きかう。

１２時半―空港周辺の道端に、「再開しました」の表示の**牛タン屋**発見、入る。

聞けば、「道路から 80 ㎝まで水が来て、店も浸水したが、道路より高くなっている分、膝下でとどまった。再開は、４月下旬から。」店員「家族は、宮城野地区で、被災。なんとか無事だったが、仮設暮らし」。客は、工事関係者のみ。

１３時半―亘理地区へ。道路は、亀裂、陥没で、修理中もあちこち。海岸近くを車で通ると、一見、普通の家並みも、見れば、１階は全部打ち抜かれ、カーテンだけが風に翻る。墓地の墓石は、ほぼすべてなぎ倒され、車庫の車は、逆立ちのまま。工事関係者以外、人気無し。

そして、**吉田体育館**（26 日バザー会場）下見。海岸からは、直線で２ｋｍ以上離れた常磐線「浜吉田駅」のすぐ近く、だが、ここにも津波の痕跡と塩の匂い。なので、体育館は、「避難所」にも使えなかった模様。

１５時半―「仙南平野」最大の被害地区、**「山元町」**へ。相当内陸部まで、津波が浸食。先ほどまでの家の形すら無い。土台だけで、一面、平坦な緑の平地に、町立中浜小学校と教習所のみ、ポツンと立つ。これでは、助からない。お供えの花が目を引く。
海岸近くは、防波堤の大きなコンクリートの塊やテトラポットが、「破壊しつくされ」散乱。それを撤去するユンボが、あちこちでアームを動かす風景。復旧、遠し。
１６時半―白石蔵王ＩＣから 15 分ほどの国道４号線そば、大河原町の**「橋本」家**へ。
外見は、素敵な、大きな、モダンな２世帯住宅。被災者支援に活躍している、主役の「若旦那（３０代半ば）」は、「出張中」、で清楚な若奥様が応対頂く。玄関入ると、「段ボール」の山。狭い我が家でも同じ光景。いやそれ以上だ。２階に上がると、すでに開封し、種類別に置かれ、「被災者」が来て、好きなものを好きなだけ、取ってゆくスタイル。
それに、「生活セット」（台所セット、入浴セット、お茶セット、洗濯セット、作業セットなど。今は休止）にして、避難所や仮設の被災者から「注文」を取り、配布するスタイル、などで活動。段ボールを置くスペースが無く、車で数分の近所の「協力者」の秋の貸し車庫に、持参した段ボール搬入。貸主の上品な女性（６０代）にも挨拶。
１９時―**福島市内ホテルチェックイン**。ロビーで、自動車販売店**社長**と「再会」。近くの「会津料理」店で、珍しい「馬刺しの数々」や会津郷土料理、会津・喜多方の酒、をご馳走になり、乾杯。「放射線浴びたら、頭が良くなった」などと軽口ながら、「孫２人を２学期から東京へ避難させる。」「原町営業所の社員の家族には、死者、行方不明者が２人」「そもそも、３月は最大の新車販売時期。３．１１で、売上・決算壊滅。新車は、売ろうにもいまだに車不足。対前年１割ダウン。中古車は、売れるがやはり在庫が少ない。」。同行した友人は、「ストレスが溜まっていそう。疲れが感じられた。」の評。
２１時―２軒目。カラオケスナック。入ると、全くの偶然で、社長のご長男が、４０代半ばの**青年経営者仲間数人**（印刷業、金物卸、歯医者、など）と飲んでいるところに遭遇。
「良く、福島に宿泊され、大変感謝します。放射能の影響で、嫌がる人が多く、困っています。」「でも、福島市２６万、郡山市３３万の市民たちは、日々放射線量や天気、風向きを気に
　　しながら、息を潜め、毎日生活しているのです。」と口々に。全員でチーズ！
２２時半―お開き。ホテルで、そのまま歯ブラシ後、ベットへ倒れ込み。

１６日（土）会津若松へ

７時―ロビー集合。フロント「有り難いことに、ほぼ満室が続いています。でも、多くが、工事関係者やマスコミの長期滞在の方々で、観光や一般のビジネス客は少ないです。」

９時半―「福島西ＩＣ」より、磐越自動車道「会津ＩＣ」下車、縁あるお**寺**へ。

ご**住職夫妻**（５０代半ば前後）の話

「支援物資の集積や、配布なども、震災直後からやってきたが、行政ルートでは、縦割りで、許可とか、モメルこともあり、上手く被災者に必要な物資を届けることが出来なくなり、現在は、中止した」

「つい、最近まで、本堂に浪江より大家族７人の被災者の方々が３ヶ月間生活していたが、３世帯別々に暮らしていたところから、大世帯となり、特に若嫁のストレスが溜まり、また別れて生活することで、出て行った。その中の一人は、東電工事関係者で、平日は、現地泊り込み。土日のみ、帰ってきたが、大変そうだった。でも、給料も月１００万、とここらではありえない待遇。近くの東山温泉には、被災直後に、多くの大熊町からの避難者が、自費で逃げてきたが、原発関係者の家族で、皆、金持ちだから出来た。その点、原発とは無関係な飯舘村の人たちは可哀そう。」

「地震で、倒れたり、ずれたのは、比較的新しいお墓。古いお墓は、しっかり土台が埋まっていて、大丈夫だった。」

で、ここでも、放射線量の話。前日の社長や青年経営者も、そしてお寺の住職までが「放射

線測定器」を購入し、毎日、子供たちの遊び場や食事材料、庭など様々な場所で、測定、「グラフ」を作ったり、して、地震、より、今も進行する原発被害の拡がりも実感しました。

ました。実際の放射線による直接被害は、おそらくまだまだ少ない、のでしょうが、長期間蓄積することの恐怖、特に子供への対応への親のストレス、という間接被害、が広く、深かまっている様子。

１１時半―会津に行くたび、立ち寄る若松駅近くの**酒屋**で、数本地酒購入。店番の若奥さんに、今回は「被災地支援」目的、と話すと、「私の実家は、仙台港近く。津波の警告で、車で点在す

る家族や姉夫婦、子供たちを乗せ、間一髪、逃れられた。しかし、仮設住宅暮しで、大変不自由している。また、友人や知合いには、死亡したり、いまだに行方不明の人がいて、切ない。」

１２時半―中山峠で昼食。昭和 50 年から通い続ける老舗**「鞍手茶屋」**。女将は、不在だったが、電話で「震災直後から客足も落ち、大変だったが、常連客が励まし、また来店してくれて、本当に元気づけられた。」ほぼ満席。でも、駐車中の車の多くは「福島」ナンバー。例年のような、通りがかりの観光客の様々な地域のナンバーは少ない。

１７時―郡山ＩＣより、一路、友人を自宅まで送り、帰宅。

７月２６日（火）―初めての亘理町「さざんか広場」へ

早朝３時出発。首都圏から人手「１０時より、宮城県亘理町吉田公民館の前庭で、被災者２００人に「さざんか市」名古屋、静岡、首都圏の約 60 人の方々から夏物衣料品を 1,200 着、生活用品 650 個、調理器具等 350 個、そして想い溢れるお手紙や現金カンパ、野菜など。

【現地レポート】

午前３時半―前日に「日用品」「調理器具」段ボール 23 個積み込み、真っ暗な中、出発。

午前５時―「ツアー」申し込みのあった横浜駅集合３人、八王子出発、小平経由２人が支援物資積み、車で出発。私の小・中高同級生・先輩や大学、社会人での友人（の友人）。

午前８時―東北高速道白石ＩＣを降り、亘理町の吉田体育館へ。すでに、100 人以上の被災者の皆さんが、日差し強い中、行列。主催者（ＪＡ亘理吉田町女子部など）や仲介者と挨拶。搬送した物資を降し、空になった車で、30 分の大河原町の倉庫へ。15 日に搬入した「衣料品」30 箱を一人で積み込み、再度会場へ。この時点で、もう汗だく。

午前 10 時―バザー開始。列は、300 人以上の長蛇に。皆さん、慌てず、じっと順番を待つ。年配者が多い。私より 30 分遅れで会場に到着したわが同行組５人は、それぞれ婦人物ブースや紳士物ブースなどへ分散。スタッフは、おおむね女性。その中で、東北福祉大の男性大学生ボランティアも。日用品、調理器具、衣料（女・男・子供・靴など）の順にブースを分けて、ブルーシートの上に段ボールからぶちまけた物資は、サイズ、男女混在。「お客様のニーズ」を聞きながら、一緒になって衣類の山をかき分け、探す。

その中で、様々な「生々しい被災当日、仮設生活」の実態を聞く。（裏ページ参照）

すでに手には、必要な品物を入れた大きなビニール袋を抱え、私と、八王子から来た戦前生まれの「おじ様」と二人が陣取る最後のシートへ。主として「サイズ 80~120 の幼児用衣料品」「一部紳士・婦人物」と「靴」ブース。なので、妊婦や幼児連れの奥さん、それに孫のいるお爺さん、お婆さんが多数足をとめる。日用品、料理器具、茶碗などは、ほぼ全て「売り切れ」。残ったのは、わずかな食器と当初の３割程度の衣料。

午前 11 時半―ほぼ、順番待ちの被災者全員が終わる。スタッフ全員で、一枚ごとにサイズ別、男女別を確認し、それぞれ段ボールに入れ直し、撤収。その最中、ヘルメット・工事服姿の十人ほどと雑談。全員、家を失った被災者で、多くが農漁民。側溝の泥・砂を除去する町の臨時職員として、１１月までの職。そのあとの仕事は見えない。ちなみに「亘理」は、全国的に有名なイチゴの産地。海辺にイチゴ畑が拡がっていた。

汗だくの彼らは、その場で、渡したＴシャツで着替え。皆、喜んでくれた。
主催者たちから、感謝の言葉と、今回を手始めに１２月まで毎月第４火曜日に、このバザーを月一回やるので、今後も協力願いたい、との要請。出来る限り、と返答。

午後２時―「地元お勧めの地元の食堂」へ、埼玉から来た、１５日に伺った「橋本夫妻」の仲間、と、８人で、昼食。自己紹介、感想、など交流。

午後３時―亘理町の海辺へ向け、戻る。遠目には、普通の住宅が並んでいる街へ。しかし、近づくと、どこも１階は、完全に破壊。そのまま、「一般車通行禁止」の山元町へ。
荒涼とした、建物もほとんどナクナッタ、見渡す限りの原野に、防波堤修理のクレーンやダンプのみが動く。破壊された２階建の自動車教習所事務所棟と、コースに置かれた破壊車両の山。ベンツ、アウディも、原形留めぬペシャンコ。
さらに、外見は、真新しい、色鮮やかなコンクリート建物、でも中は、廃墟の小学校。震災の翌朝、寒い中、２階外階段で十数人が助けを求めていた場所も確認。
そのまま、福島県新地町へ抜けよう、とするも、県境で「通行止め」。
やむなく、戻る途中、カーナビは、常磐線の踏切を渡る警告。しかし、踏切や線路、電柱の痕跡は全くなく、根こそぎ流された後は、ただのコンクリートの道だけ。

午後５時―白石 IC から、途中、わずかに休憩し、夕食も取らず、帰路へ。
浦和 IC で、皆、「やり切った充実感」で、満面の笑顔のお別れの挨拶。

午後１０時―帰宅。長い一日、無事終了。

≪被災者コメント≫

① 被災後の模様

おおよそ、亘理地区の海に近い家ほど、家ごと流され、車・徒歩で避難。２~３㎞ほどの家は、１階が完全に破壊され、２階へ避難。
「津波が来る、ってたって、毎回だから、慣れちゃって、またか、だよ。で、逃げ遅れた。」
「自分は、家を全部流されたが、何も持たず、慌てて逃げ、間一髪助かった。だけど、隣の家の奥さんと娘さんは、自宅に物を取りに行く、と戻っていった。２人は　助からなかった。」
「３ｍの高さまで浸水し、２階で救助まで３日間、飲まず食わず。寒い中、震えていた。」
「最近も、すぐ裏の畑の汚泥をダンプで集積場に運び、仕分けしてたら、遺体が入っていた。」
「葬式ばかりで、付き合いの手前、香典を包まないわけにはいかない。相当の出費だ。喪服も黒い靴も無く、このバザーで頂ければ、と思って来た。」など。

② 仮設住宅暮らし

亘理地区は、海岸線から５㎞前後の広場に建てられた仮設住宅に数十世帯が住む。
「冬物をしまうスペースがない。今回もらった夏物も、置くところがなく、困ってしまう。」
「４畳半２間、では、４人家族では、狭い。兄弟姉妹、でも年頃で、同じ布団で寝る訳にはいかず、２段ベットを買って、せめて一部屋雑魚寝、でも、我慢している。」など

③ 救援物資への要望

多くは、感謝の言葉。要望を聞きとったのは、ごく一部。次回の参考。

「都会のおしゃれな服は、似合わない。モンペのような感じのズボンが良い。」
「も
「炊 かかる。」
「赤ちゃん用や老人用オシメ、耳かき、爪切りなど日用品がもっとあったらありがたい。」
など。

８月２３日用支援要請チラシ

―２０１１．７．２８　　齋藤記

★宮城県亘理地区　「毎月第４火曜日」無料支援物資配布「さざんか市」★

あなたの段ボール箱≪緊急支援物資≫で、

被災者に笑顔を！

３１１　有志（連絡人：齋藤　大介）
連絡先：０４８－－
メール：duke-s@kd6.so-net.ne.jp

支援物資は、あなたのお友達三人のご協力依頼で、特段の物量に！
また、「さざんか市」当日の手伝い、兼「被災地」体感ツアーへもどうぞ！

■3. 11。宮城県南部、福島県に隣接する亘理地区（亘理町・山元町）では、海岸線から幅数ｋｍにわたる津波被害で、町の半分水没し、死者 1000 人近く。生活の足、常磐線は、不通のまま。家族・親戚・友人・隣人、そして、家屋・財産・生活物資を流され、ゼロから、いや、マイナスからの出発で、「普通の生活」への道のりが、いまだ描けません。しかし、震災直後には、7000 人もの被災者で溢れた亘理地区の避難所暮らしも、今や、仮設住宅や、修理した家屋住まいが主流となりました。

■この生活環境の変化で、必要な生活物資は、大きく変化。そこで、このニーズに応えるべく、毎月 1 回、地元ボランティアの主催で、12 月の冬物まで、水没地区の吉田公民館（体育館）で、被災者支援物資の無料配布「さざんか市」がオープン。

■**第 1 回。7 月 26 日（火）。**

早朝、首都圏各地から 4 台 8 人、5 時間かけ、会場へ。到着すると、すでに長蛇の行列。午前 10 時スタート。強い日射しの下、現地ボランティアスタッフ十数人とともに、「フリーマーケット」＋「特売場」の売り子役で声をかける。衣料品は、サイズ合わせが一苦労。ニーズを聞き、一緒になって、「これ、どう？」、笑いが溢れる。そして被災当時や現在の状況も聞く。1 時間半で来場した被災者 400 人近く。予想を遥かに上回る。青シートに置かれた大量の物資も、僅かな衣類を残し、ほぼゼロ。嬉しい悲鳴。さて、困った。

■**次回は 8 月 23 日（火）。**毎月 12 月まで開催、の物資が足りない！のです。お願いします。
以下の支援物資、眠っていませんか？（例示した品目以外も多様な品が必要です。）

①衣料品―**秋物（夏物不要）。**男女・子供・幼児用古着全般。下着・靴下は新品のみ。
震災以来、初の秋。長袖ものです。年配者多く、サイズＬ、胴周りがゆったり歓迎。
法事用礼服、マタニティ・オムツも。ただ、名前入り、はご遠慮させて頂きます。

②調理器具—鍋、包丁、まな板、食器、はし、ナイフ・フォーク、ボールなど

③寝具—布団、毛布、シーツ、タオル、枕など

④靴 葬儀多く、黒靴も。

⑤日 り、耳かき、乾麺、缶詰など。

★梱包・送付上の手順と注意点★

★送付先や梱包時の注意点などは、裏面をご覧ください★

はじ ラ

ンテ

多忙な現地ボランティアのロードを軽減する為、「市」開催当日に頂いたまま持ち込みます。そして、会場のコーナーごとに表記された種類別に積み上げ、初めて開封し、中身を出し、並べます。

特に、衣類は、サイズ混在・山積みでは、被災者の方のニーズの品物はなかなか見つかりません。

「料理」に例えれば、「素材の下ごしらえ」までを、皆様にお願いする次第です。

ステップ１：梱包前に、種類ごと、サイズごとに、ビニール袋か、紙袋で分別包装する。

特に、衣料品です。男女別に「上着・シャツ類」「ズボン・スカート類」「ワンピース」「下着・靴下」

「その他」に区分。さらに、サイズ別に「ＸＬ・・ＳＳ」、「子供」は、「乳幼児・８０・・・１４０」に分別。たとえ一品でもビニール袋に入れ、マジックなどでその種類・サイズを表記下さい。

これに対し、日用品・雑貨、調理器具などは、大まかな分別で結構です。靴は、左右セット下さい。

ステップ２：段ボールの上部・側面には、ブース名（混在の場合は、複数）を大書きする。

「市」の会場では、以下７つのブースに分け、陳列します。そこで、段ボールの**「上面」「側面」**の両方に、マジックで、以下種類（コーナー）別に大書して下さい。搬入された段ボール箱は、「表記」されたとおりに、置きます。ブースごとの段ボール箱が望ましいのですが、少量の場合、混在で、

お送り頂いて結構です。

【混在の場合の記載例】　「女もの・男もの・寝具・日用品」などと表記。

①日用品—「茶の間」「洗面所」「風呂場」「トイレ」「玄関」などにある雑貨、暇つぶしグッズ等。

以下②～⑦以外「その他」。オムツ・哺乳瓶等などこちらのコーナー。

②調理器具—「台所」にある、鍋、釜、フライパン、まな板、包丁、食品、など。

③寝具—「寝室」にある、枕、シーツ、布団、など。

④女もの—「タンス」「クローゼット」にある、女性用秋物衣料品。下着含む。

⑤男もの—同じく、男性用秋物衣料品。下着含む。

⑥子供もの—乳幼児・小・中の秋物衣料品。名前入りは駄目。下着含む。但し、オムツは①

⑦靴—ふだん履き、ズック、長靴、など。ただ、一対ごとに、紐でしばるか、袋へ。

ステップ３：　宛名と発送者を書く。

≪宛先≫　〒９８９－××××

宮城県亘理郡亘理町　　沼辺　　様宛

電話：

★発送者は、ご自分のお名前とともに、必ず、**「３１１　有志」と連記**下さい。

受取りする際、どのグループから来たか、先方が判断出来るようにする為です。

４　最後に、宅配便の時間指定を、「午後４時以降」とする。

宛先は、「さざんか広場」代表世話人のご自宅です。必ず受け取れる時間を記入下さい。

８月２３日（火）―亘理町「さざんか広場」２回目。

前夜は、台風並みの暴風雨。現地はしかし、決行との決断。初回を倍する20人参加。

【現地同行者レポート】

１　参加者Ｔａさんのレポート

２３日、宮城県亘理地区支援物資配布バザーに行った。

早朝４時頃から、八王子、世田谷、川崎、我孫子などから車に分乗した首都圏メンバー約２０人が、東北自動車道を経由、朝８時～１０時にかけ、亘理地区会場「吉田公民館」へ到着。

まず目にしたのは、開始まで２時間以上前から、公民館を一周、整然と我慢強く待つ、長蛇の列。

支援物資は「食料品」、「日用雑貨」「台所用品」「衣料品」の順番で配られていく。私は台所用品の食器類を担当した。徐々に被災した人たちと言 葉を交わせるようになっていったが、被災当時の話はまったくせず、日常的な会話を交わしすなかで、彼らのある種の優しさを感じて、こちらの心が柔らかくな るような気がした。

午後１時半ごろに後片付けをして、近くのドライブイン「サザエ」で今回参加したメンバーで「昼食兼交流会」をした。そして２時間ぐらい被災した 海岸沿いの亘理町、山元町を時折下車しながら見て回った。テレビ映像で見るのとはまったく違う。雑草が生えていて緑に覆われているので一見穏やかに見える が、わずかに残っている堅牢な建物の無残な姿、数箇所に集められたこれ以上痛めつけられないほど破壊された車両の残骸、海辺のしゃれたデザインの小学校校 舎の内部破壊された教室、どれを見ても胸に迫るものがある。山元町では１０００人もなくなっているのだ。野次馬根性といわれれば、否定はしないが、自分の 眼にこの惨状を焼きつけておくことは大事なことだし、実際、「見なくちゃわからねーよ」体験であった。この活動は毎月第４火曜日にやるので年内はできるだけ参加することにした。ほんのちょっとのお手伝いだけど継続してやらなくてはね・・・・。友人曰く「最近、お前老年性多動症気味じゃない」、「落ち着き がないのは今に始まったわけじゃねーから、しょーがねーな、あと１０年か２０年しか生きないから体が動けるうちは多動性隠居でいくよ・・・・・。」

お願い：比較的きれいな鍋、フライパン、タオル、冬物衣料、等余ったものがあれば寄付を。

約５００人程の人が待っててくれた。今ではほとんどの方が仮設住宅か自分の家の２階に住んでいるそうだ。年配の方が多く、衣料品は大き目が喜ばれた。仮設住宅でスペースのないのでまだ冬物まで手が出ないみたいでした。食料品、日常消耗品からなくなっていった。

ぽつんと残された住宅。もちろん住んでいない。この地区は基本的にまだ立ち入り制限地区だ。
屋上まで津波が来て、まとまってなくなった人がいた自動車教習所。周りに自動車の残骸が集められていた。

考えられないぐらい津波の破壊力の恐ろしさを見せ付けている。

車のナビに常磐線の踏み切りの表示が出ている。

これが常磐線の踏み切りの横。線路が跡形もなくなくなっていて、道路状態になっている。

山元町のしゃれたデザインの小学校。内部の破壊状態を見て胸が痛くなった。

２　参加者Ｔｅさんのレポート

被災地へ行った

２０１１年8月２４日（水）午前９時４３分

あるボランティアグループに参加して日帰りで宮城県亘理町へ行った。

仙台空港の南 15km くらいの所である。従って一帯は空港と同程度に津波の被害を受けた。

全国から送られた日用品などの支援物資を整理して並べ、近隣住民へ配る作業である。

500 人くらいの人が集まった。目ぼしいものを時間をかけて物色するため順番待ちの行列はなかなか進まない。それでも皆辛抱強く待ち、最後の人に配り終へた時は 3 時間程を経過してゐた。 配布したものは、保存食料品、日用雑貨、おむつ、学用品、本、靴、食器、台所用品などで、本来中心となるべき衣類は天候がはっきりしない屋外でのイベントだったため本格的な提供はできなかった。瓦礫の撤去作業なんかは我々にはとても無理なのでこんなお手伝いが相応であらう。それでも集まった人々とのやり取りで、この場所での生活振りを垣間見ることはできた。

後片付けを終へた後、リーダー格の人の案内で立入の規制されてゐる海岸沿ひの道を南下し被害状況を「視察」した。

6 台の車がぞろぞろ連なって行き、時々停まって写真を撮ると云ふ様子は全く物見遊山である。

がしかし、地元に迷惑を掛けない限りは物見遊山であっても良い。現地で実際に自分の目で見ることで事の大変さが良く分かる。壊れた車などの瓦礫の山や廃墟となった建造物などは報道されるとおりだが、一番強く印象に残ったのは何も「ない」と言ふことだ。

今は瓦礫の撤去も進み夏草に覆はれて一見緑の草原に見えるが、ここはアフリカのサバンナとは訳が違ふ。街があり、田圃があった場所だ。

良く見れば草の中には住宅の基礎や墓地の礎石が残る。常磐線の線路も草に覆はれて遠目には何処にあるか分からない。

今頃はたわわに実った稲穂が揺れるであらう田圃も只の草原である。

ぐるっとあたりを見回してもかろうじて残った建物の残骸以外は何も「ない」。

３　講談師「神田京子」さんのレポート

2011.08.25　支援物資御礼！

機会ある毎にお声掛けさせていただいてます支援物資や支援金の御礼とご報告です。

いつもご協力ありがとうございます！

先日宮城県南部の被災地を訪ねました。まずは新幹線で白石蔵王へ。

車で 20 分ほどの大河原町に住んでいらっしゃるボランティアの橋本様宅にお邪魔しました。

以前もブログでご報告させていただきました「てをつなごう 311」。支援会を立ち上げられてからこの五ヶ月間、状況に応じて より適した支援の形を探りつつ 山元町、亘理町中心に物資提供の活動をし続けていらっしゃいます。 写真の通り、全国から集まった支援物資は一目で分かりやすく所狭しと並べられ、自宅の部屋を二部屋使っても 入りきらないくらいの量をストックされていました。クチコミで需要が広がり、近所に避難されている方々や遠方の被災地の方々が物資を取りにいらっしゃったり定期的に行われている亘理町のバザー(無料配布)に出されたりしています。 とにかく、リサイクルショップよろしく綺麗にジャンルに分けて並べてあるので選び易く、見ているだけでワクワクします。
翌日はこの物資の一部を携えて宮城県南部、阿武隈川河口近くの沿岸の町亘理町を訪ねました。
イエーイ！！町内にある、吉田体育館の駐車場をお借りした現地ボランティアスタッフの方々による無料配布のバザーです！！やったー！！来たぞー！！パフパフ！！という気持ちも、最初なくはなかったのですが現地入りして３分とたたないうちに深刻な気持ちになりました。（やっぱり離れていると温度差がある・・・・）。なんと、この建物の玄関は、てっぺんまで水に埋まったといいます。海に近い町といっても、ここから海は見えないのに津波の水勢はものすごかったことが分かりました。よって、町は半壊。
バザーは朝 10 時に始まりましたが、集まった 400 人を上回る被災者のみなさんにより、12 時半くらいまでの間に衣類や食器を除く支援物資のほとんどがなくなりました。
被災地の方々はまだ生活に余裕はなく必死です。仮設住宅入居が完了しても、生活の不安はぬぐえず物流が回復しても、他でお金がどれだけでもかかるから消耗品や食料は少しでも配布されると嬉しいのです。ライフラインはまだ復旧してない場所もあります。
報道で分かることも多いが、報道では分からない部分が現地には多い。
改めて、それぞれが普段担っている役割を結集し、様々な方向から一つ一つ解決策を見つけなくてはいけないと思いました。
夫々の分野の意識ある人々が被災地とのつながりを大切にしなくてはいけないと思いました。そうすることで、普段の自分の役割をも改めて磨くキッカケを得、磨いた役割は被災地で喜ばれるのです。持ちつ持たれつの、日本本来の、あるべき姿にならなくてはいけないと思いました。

（吉田体育館裏）↑曲がったフェンスを囲む生命力の強い雑草。
（吉田体育館裏）↑塩害でサビ色になった木々のふもとに生える生命力の強い雑草

（吉田体育館裏・・・水溜りの水は雨水だが、田畑からは海水の匂い。ここから海は見えない。）
壊滅的被害を受けた田畑を囲む生命力の強い、雑草！
生命力の強い雑草！！かヒントをくれればいいのに・・・。
2011.08.27 （土）
（前略）さて、先日伺った宮城県南部の被災地。バザーのお手伝いの後、被災地の現状を視察させていただきました。今はボランティアの形も多様化し個人発信でツアー形式に「復興お手伝い＋被災地ツアー」をセットで(無料)面倒みてくれる方がいらっしゃるようです。
私は、東京から車に乗り合っていらした日帰りツアーの方々の車に便乗させていただきました。一行は壊滅的被害を受けた山元町へ。バザー開催地、亘理町の近隣の町で、以前避難所に、皆様からの募金(公演後集めさせていただいた)でお肉を送らせていただいた町です。
家はなく、基礎部分だけが残り何もない空き地となっていました。その広さは車で 30 分くらい走ってもまわり切れないほど。雨のせいで一面湿地と化し、淋しさが増していました。今は、雑草が生えていて緑が多いので視覚的な衝撃は少ないですが一面泥まみれの頃は、さぞや不気味だったことと思います。とにかく町がない。掃除された道路の脇には撤去された瓦礫の山。即席の集積場が何箇所もあり、復興への半歩がようやく済んだという感じでした。被災地を目の当たりにしないと分からない感覚のなんと多いことか。「前を向いて進もう！」という口実で「東北のお酒を飲もう！」「東北の農産物を食べよう！」といい、少しばかり飲んで食べて被災地の為になったつもりでいる偽善者の心が私自身の中にあったがそれはただの言い訳で、それだけでは全くダメだと思いました。前進する為には現状を知り続けなくてはならない。 といって現状を見て落胆をし、下を向いて止まってしまっては何にもならない。とにかく私は、つながりながら「講談」をし続けます！！これぞ、「講談」らしい思考回路なのです。

９月２７日（火）―亘理町「さざんか広場」３回目。

台風一過快晴。前回を上回る２５人で、首都圏から出発。

【現地レポート】

各地で猛威を振るった台風の翌週で快晴に恵まれた。
早朝３時頃から、２５人が、八王子、小平、横浜、朝霞、日立、東松山、仙台から車９台に分乗、さらに新幹線白石蔵王駅で４人を乗せ、亘理地区会場「吉田公民館」へ到着。午前３時から並び始めた、という長蛇の行列を、計測器カウント。開始１０時頃には４００ 名を超える。今月は、全国の支援の輪が急速に広まり、約１００名の方から送られた段ボールが、何と 500 個。受ける現地主催者は、「嬉しい悲鳴」だ。さらに車に積んできた物資も降ろし、会場造りに取り掛かる。前回、天候不良で余り出せなかった「秋冬」衣料品は、山のよう。
我々は、お揃いのサッカーシャツに首からは、名前入スタッフカード。
開始。１０人づつ、順番にコーナーに誘導、混乱は無い。自前の大きなバックや、会場で配る大きなビニール袋を手に、「童謡」や「上を向いて歩こう」など、BGM が流れる中、ゆっくりと進

んでゆく。「バンドネオン・バイオリン・フルート・ベース・キーボード」演奏も、我々の有志だ。
さて、被災者の方々は、仮設住宅や、自宅の２階暮らしなどまちまち。家族構成も異なり、ニーズも多様。そして仮設住宅は、狭い。保管スペースが足りず、「その日暮らし」にならざるをえない。町からの援助は、電化製品など、入居後２週間だけ。その後は、自立すべき、と援助もない。一方で、職場も無くなり、収入も厳しい。自宅に戻った方々も、行政からは見放されたまま。なので、支援のニーズは、減らないのだ。

「食料品」―大量に届いた飲料水、りんごは、「一人一個」充足。それ以外の缶詰、レトルト食品、お菓子、などは足りず、渡すものが無くなる。**「日用品」**―ミヨシ石鹸の御好意の「石鹸・シャンプー」は、大量に配布。でも、なぜかボディーシャンプーが無くなる。さらに、数の少ない布団や毛布、そして紙オムツは、アッと言う間に無くなる。行列の被災者の方々が口々に、寝具が欲しい、と言う。靴も、ヒールの高いモノを除き、「売れ行き」が良い。**「台所用品」**―これまで「売れゆき」の良かった食器、鍋・釜が余り始めた。**「衣料品」**―秋冬ものの量は既にほぼ充足した。しかし、「おしゃれな都会の人と違い」、ゆったりしたズボン、や胴回りが大きい、Ｌサイズが足りない。**「本」**―こども向けの絵本などが多く、残ったが、子供連れで立ち止まるお母さんや、単行本を嬉しそうに抱えてゆくオジサンもいた。

後片付けも終え、午後２時より、毎回好評のドライブインで「昼食兼交流会」。隣で食事中だった被災者の数人も、飛び入り発言頂きながら、冬に向けて必要な支援物資の絞込みをした。やはり、食品、寝具などだ。
午後３時すぎより、被災した海岸沿いの「亘理町荒浜地区」「山元町」を、時折下車しながら、体感。すっかりススキの草原となって、秋めいた風景の中、半年以上経過しても、寂しげにご遺体が発見された場所を示す「ピンクのリボン」が、いまだ荒野と化した市街地のあちらこちらで揺れる。涙ぐむ参加者。白石インターは、５時半。思えば、午前２時起床し、午前様の帰宅。風呂などで午前２時就寝。不思議と睡魔に襲われない「奇跡の日」だった。（齋藤）

１０月２５日（火）―亘理町「さざんか広場」４回目。

台風一過快晴。前回を上回る２５人で、首都圏から出発。

【現地レポート】

朝３時半出発し、大泉学園で女性１人（２回目参加）を拾い、一路、亘理へ。常盤線の駅で、夜行バスで仙台入りした会社の先輩も拾い、会場入り。
開始１時間前で、これまで最高の、既に 600 人の長蛇の列。我々首都圏からのスタッフも３２名、と過去最高。開始２０分で、布団や座布団「完売」。お米１０キロ、２５０袋、もあっと言う間になくなり、わずか開始１時間２０分で、衣料品、本、食器の一部を残し、「完売」。
後片付けで１時間半。
１時から食事、も、人数が多く、席があくまで、ドライブインの駐車場で、自己紹介。一応、私の縁、の皆様とは云え、私も初対面の方々も多く、私の小学校時代、中高時代、大学時代、

会社関係などと時代ごとで自己紹介。３０分後、ようやく食事。いつもボリューム、安さ、美味さで好評。一同に畳の上で話せるのも魅力です。
３時、被災地の海岸沿いを車１０台余り連ね、ゆっくり体感。壊れた家の連なる街から、全く建物の土台以外痕跡のない原野と化した街へ。最後は、２５人の生徒、職員が亡くなった自動車教習所などを見て、解散、ほとんどは日帰り帰宅。
でも、数組は、福島や宮城の温泉に泊まったり、で、一部は１人旅、一部は岩手県へ夫婦でボランティア、など。私も、妻と、大学時代の親友夫婦とで南三陸のホテルへ行きました。
翌日は、まず、露天風呂から御来光。地上２０m近いホテルの露天風呂も、被災。８月に復旧した痕跡が、枝に引っかかる布。ここまで来たか！そして、南三陸町→女川→石巻→東松島→松島、と被災地の梯子をし、各地各様の凄まじい津波の被害を見てきました。海岸線が平坦な亘理、山元町とは違い、リアス式海岸で、狭い山間と海岸線の街並み、それは、まるで砂場で遊ぶ時のスコップのような形状が、津波の高さ、勢いを増幅させ、信じられない被害をもたらしていました。
地上２０m以上の建物を飲み込み、コンクリートのマンション？を横倒しにし、またスーパーやマンション、病院など市街地に点在する巨大建造物の最上階までを破壊。
４階まで打ち抜かれた病院近くに、キティちゃんのお人形が、泥だらけで大の字で寝ていたりして、改めてそこにあった幸せ、の痕跡。つい、最近までの人々の暮らしや喧騒、生活感が感じられ、住宅の残骸や、荒野と化した亘理・山元町より、さらに無残な想いに囚われました。
そして、移動の間には、多数の人里離れた不便そうな場所に仮設住宅が点在。こんな山奥に？街中近くにある亘理の仮設住宅が、まだ恵まれて見えました。
最後は、海から被災状況を見たい、と松島で観光船で５０分のクルージング、でしたが、他の地域に比べれば、「軽度」とはいえ、やはり、海辺のホテルや海岸線に並ぶ住宅などに被害の後も残り、ガレキも積まれ、「島々が津波から守ってくれた」というにしては、普通なら大変な被害。他の地域が酷すぎる、ということでしょう。
昨晩１０時すぎの帰宅でした。（齋藤記）

１１月１１日（金）―渋谷カトリック教会で「寝具」集め、亘理へ運送

大学時代のサークルの先輩が所属する教会で現地ニーズは高いが、値段も大きさもかさばる寝具類を集め、トラックで亘理町の現地ボランティア宅に搬入しました。

【現地レポート】

１　**「寝具」搬送**―私の大学の先輩が、所属するカトリック教会で１０月下旬より呼びかけて頂いた「寝具・暖房器具」（添付チラシ）が大量に集まりました。これを受け、朝９時より、急遽駆けつけて頂いた方々１３人で、雨対策で、寝具や座布団を、ビニール大袋に入れ、紐で
縛る作業を１時間。特に、朝、「田園都市線の人身事故」で、交通機関が大混乱。途中の駅か

ら歩いてきたり、一度は、来ることを断念したり、と皆さん、苦労して駆けつけて頂きました。本当に助かりました。さて、包み終わると、全員２ｔトラック積み込みで、アッと言う間の３０分。あれだけの寝具も、全部入りました。

１０時半教会出発。教会関係者２人と私で、三菱キャンターに乗り、雨の中、時速９０ｋｍ。私とは、初対面のお二人、いずれも「理系研究者」、穏やかで、芯があります。当初は遠慮がちだったのも、そのうち、打ち解け、楽しい旅でした。沼辺宅へ到着したのが、午後５時。見ると、大きな敷地の沼辺宅の屋根付き駐車場には、既に大量の段ボールがうず高く積まれていました。それに、寝具、座布団を沼辺さんたちとともに２トン車から降ろすと、山のよう。既に寒さも厳しくなり、２２日バザーまで待たずに、早速、「在宅被災者」へ優先して配布することとし、５時半には失礼しました。

２　福島支援

旅館の若女将が、教会関係の縁で、土湯温泉「ニュー扇屋」へ。７時をすぎ、すぐ食事。

そして、若女将や仲居から、ヒアリング。

「３１１の際、ここでは、１週間停電、携帯も、街とのバスもダメ。寒さの中、玄関ロビーに温泉を利用した床下暖房の上で、従業員もお客様も一緒の、雑魚寝が３日間続いた。」

「元々土湯温泉には、２５軒ほどの旅館があったが、３１１地震で、建物に大きな亀裂が入って修復出来ず、倒産、または、撤退した大型ホテル・旅館が、９月末までに４軒。いまや１５軒ほどに減ってしまった。３１１地震直後から、浪江町１２００人が土湯温泉に仮設住宅が出来るまで避難、当旅館にも 90 人宿泊した７月までは、街も賑やかだったが、８、９月と、バタッと客足が落ち、自転車操業となり、脂汗が出て、自律神経失調症になった。ともかく、放射能など風評の影響は厳しく、こうやって泊まりに来て頂けることは、涙がでるほど嬉しい。」

６０度の高温源泉を加水、機械的冷却をせず、の源泉かけ流し、熱かったでした。そこに入ってきた福島県内のお客も放射線量の数値をスラスラ、と言いながら、「良く来てくれた」。そういえば、道で会った県民も、「福島は大丈夫なんだから、来て欲しい」。

宮城県、岩手県、[illegible]客の減少、などで、疲弊して[illegible]

「観光」も「支援メニュー」ぜひ、年末年始の休みなど、東北方面へお出かけください（齋藤）

渋谷教会内で配布されたチラシ

宮城県亘理地区へ布団などの寝具を！！

7 月から宮城県亘理地区で無料支援物質配布を行っている「さざんか市」に教会全体で協力することになりました。

「さざんか広場」の連絡人、齋藤さんの友人である渋谷教会の〇〇さんに紹介され、渋谷教会の有志の人々が個人的に衣類や台所用品を亘理地区の無料支援物質配布へ宅急便などを使い送ってきましたが、今後冬に向かい、布団などの寝具、座布団、暖房器具などの要望が高く、送りたいという方も多いのですが、宅急便の費用が高いことからトラックで運ぶ事にしました。是

非、皆様のご協力宜しくお願いします。

☆　**下記の支援物質を地下大講堂の舞台までお持ち願います。(11 月 6 日～10 日、午後 2 時～5 時)**
地下大講堂まで直接お持ちください。引き取り人がお待ちしています。ご自分で持って来られない方はご連絡ください。

寝　具　：　最もニーズの高い掛け、敷布団。そのほかコタツ布団、毛布、シーツ、タオル、枕など
(布団などの寝具は干してからご持参願います)
座　布　団　：　干してからご持参願います。
暖房器具　：　電気毛布、アンカ、湯たんぽ、電気コタツ、電気ストーブなど

☆　**積み込み作業にご協力願います。**
11 月 11 日(金)、9 時よりトラックに積み込み作業を始めます。

☆　**ご寄付**
運送に必要なガソリン代などの費用を賄うためのご寄付をお願いします。

ご質問、連絡先は:

××　　03－3○×○－×○×○

△△　　０３－3○×○－×○×○

---

11 月 22 日（火）―亘理町「さざんか広場」最後の第５回目。

当初予定していた１２月は、年末で、寒い中、行列する被災者の健康問題を懸念し、中止。また、秋には、亘理町だけでなく、各地で、「支援物資」受け取りや配布を行政や社会福祉協議会では取り扱わなくなり、これが最後の「大規模な支援物資配布」となりました。

【現地レポート】

２２日「さざんか広場」―午前１時半。千葉から３名、午前２時、八王子から３名、を皮切りに、各地から１１台に分乗、新幹線白石蔵王駅で２名、常磐線亘理駅で２名もピックアップし、31 名が続々現地入り。前回までの「先着順」による行列は、毎回過熱し、深夜から並び始める「異常事態」。夜中は、気温も零度となり、初めての「先着順廃止」＝「整理券（番

号付き抽選券）配布」という「難題」に挑戦しました。それでも、私が着いた朝７時には、場所取りが数十人。１０人ずつの行列を作る、抽選番号を貼ったボードを掲げ、ハンディースピーカーで、500 人以上の番号を、２度ずつ連呼。喉も枯れます。特に今回重点としたお餅は、最初の軽トラックに満載。カードにコメント入りのお餅など 570 人の参加者全員に配ることが出来、また、寝具も、毛布の大量提供があり、600 人近くに最大１人２枚配布出来、こちらが２ｔ車で１０日ほど前に運び込んでいた布団類も「完売」。その他、粉ミルク、レトルト食品、など食料品始め、石鹸・シャンプーなど日用品などはいつも同様、「完売」。食器、衣類の一部が残るものの、「南三陸町」「フィリピン」などに送る為、ほとんど無駄無し。抽選作業に当初手間取ったことから、遅れがちにはなり、これまでより１時間遅れで片付け終了。
２時半からいつものドライブイン。
食事後、電話すると、「（４時閉店、なのに）いつまでも待っていますよ。」と言われ、４時すぎ、９月に営業再開した、亘理町の農家 50 人で運営する農産物直売所「夢いちごの郷（さと）」の仮設プレハブ売店へ立ち寄り、いちご始め、林檎やもち米、カリフラワーなど各々買い物支援。その後、真っ暗になった被災地の海岸沿いを車１０台余り連ね、ゆっくり体感。道路に点滅する工事車両用の明かり以外、いつも訪れる自動車学校も見過ごすほどの闇夜で、解散。多くは、日帰り。一部は、仙台に出て、さらに別なボランティアなどへ。７人は、南三陸町のホテルへ。
２３日「南三陸町・女川・石巻・松島」一露天風呂で御来光を仰ぎ、南三陸町へ。
最後まで避難をアナウンスした女性職員ら２０人近くが亡くなり、町長ら辛うじて非常階段や塔に掴まり、助かった、防災センターや志津川病院へ。海岸線を走ると、どリアス式海岸特有で、山あいに孤立した小さな漁港、漁村が連なり、どこも、海岸線から山間の高台までが、えぐりとられ、被害の大きさが、道路や木々に巻かれたピンクや青のリボンの多さで、うかがわれます。遺体が発見されたマークだからです。雄勝町では、南三陸交通の大型観光バスが公民館の屋上に。これも、また「信じられん」。川には、傷ついた鮭が登る姿も目撃。観光名所の町、の復興は、いつになるのでしょうか。女川町では、地上から城壁のような高台にあった病院で、津波の被害が、１階部分、２ｍまで来た、院内でも車椅子の４人が亡くなり、避難してきた数十台の車も流され、多くの人が亡くなったことの説明。この高さの津波！信じられない、と誰もが言いました。そして、ボランティアの姿が目立った石巻市内の最も被害の大きかった市街地へ。最後に、松島の小島を散策。すると、最も高い展望場所にも、ピンクのリボンが３つ。市街地から流されたのか、それとも、観光中に亡くなったのか。夜、１０時半帰宅。900ｋｍを超えるドライブ。さすがに、爆睡しました。
そして、最後に、２日間ご一緒だった参加者からのメッセージ、です。
「現場を見て、現場の声を汲み取る事の大切さは、ただマスコミなどの報道で入手する情報とは、また違った視点での情報収集と今後の支援対策に繋がり、ボランティア活動には欠かせないものだと思っておりますから、今回の「さざんか広場」での活動、南三陸町、石巻、女川へのツアーは、本当に貴重な体験でした。やはり情報で得た被害状況を遥かに越えた想像を絶する地獄絵

をリアス式海岸線を走りながら巡り、被災者の最期の叫びも聞こえてきました。
「さざんか市」は、ひとまず終了しましたが、新たな形で支援活動は継続してゆきたいと改めて強く感じました。」私も同感です。（齋藤記）

【総括レポート】

11 月 22 日の宮城県亘理（わたり）町の被災者支援バザー「さざんか市」で、現地主催者のご自宅への支援物資送付と、５回のバザーでの現地でのサポートは、無事終了しました。
７月以降、現在までの５ヶ月間、およそ展開の読めない、走りながらの頼りない活動だった関わらず、想像も出来なかった多くの方々に支援頂き、本当に有難うございました。
以下、長くなりますが、「概括と今後の方向」、そして「最後のバザー報告」です。

Ⅰ　５ヶ月間の概括

①　支援物資

バザーに車満載で運んだ物資も入れると、段ボール 1000 個をゆうに超え、さらに、布団のみ２トン車満載で運び、お餅も、来場者全員 570 人全てに行き渡る、凄まじい「支援物資の量」。
現地主催者へ支援物資を送付された方 300 人、それにバザー参加者自宅に支援物資を運んだり、
布団や餅など、組織的に送って頂いた方々なども含めれば、700 人以上の方々が参画頂きました。（神奈川・埼玉・千葉・東京・茨城。遠くは、九州、関西、中部、四国、秋田、長野など）
特に、10 月末で衣料品などの送付を終了し、重点品目を絞ると、わずかな期間で、布団や暖房器具、お餅などが一挙に集まったのですが、これには、裏では様々な皆様の悪戦苦闘があったことを知っており、皆様の困難を突破する熱意、や創意工夫に、頭が下がります。
本当に皆様からのお声かけで、置き場に困るほどの支援物資を頂き、有難うございました。

②バザーに来場した被災者の現状

現地主催者の当初の狙いであった、行政から支援のもらえない集落、150 人程度の「在宅被災者支援」のはずが、FM 放送や口コミなどで「仮設被災者」にも拡がり、当初の７月から、見込み違いの 300 人。それが、毎回増加し、結局 600 人、５回通算では、延 2400 人が来場され、まず、「在宅被災者」と、「仮設被災者」の置かれた環境に大きな違いが出ており、双方が、上記支援物資の大半を配布することが出来ました。そこで、顔見知りになった方々も出来、日々の暮らしぶりを知ることも出来ました。
相手が「羨ましい」と強く感じていて、行政の限界も痛感しました。つまり、一方は、「ともかく自宅で暮らせて羨ましい」、他方は、「行政からお米や布団、電化製品、暖房器具などがもらえて羨ましい」。フトしたことで、反目しあう場面がありましたし、私も被災者の方々からの「日常生活の現状」のヒアリングの冒頭、まずどちらかをお聞きした上で、注意深く、会話しました。

また、本来は、一回切りの行列に、二度、三度並んだり、いったん車に積んで、また戻る、と言う光景も多く、行列して、待機している被災者からは、「あの青い上着の奴、取り締まってくれ。俺たちの分が失くなっちまう。」などとクレームがつくのが、最近、特に目立つようになりました。しかし、一方では、「これは、俺（女性でもオレ）より欲しい人がいっぺから（いるだろうから）一つで良い。」「物をタダで貰うことに慣れてしまうことは良くないので、必要最小限にする」と言う、遠慮がちな方々も大勢おられました。
震災直後の「当座生きる」ことから、今後どう暮らしを組み立てるか、に皆の目線が移りながらも、多くの被災者は、「その日暮らしが精一杯。」と言います。見た目は、近所にスーパーやコンビニも営業し、お金を出せば、色々買えます。でも、１人の老人が言いました。
「生活するのに、これまでお互い収穫した米・野菜や取れた魚、そしておかずなどを物々交換していたような地域だったのが、何でも金出して買うしかない。ホントに皆、収入が乏しい中、生活苦だ。タダで、一日分、いや一食分でも頂けるのは、本当に助かってるんだ。遠路、大変だろうが、本当に有難う。」例え被災者の方々が「もらい慣れて、感謝の気持ちが薄らいだ」としても、クールに「無料の支援物資配布自体は、相当長期間必要」な家計の経済構造、なのです。

③バザー支援スタッフ

毎月５回のバザーでは、延べ約 110 名。リピーターも多く、実数で 64 名が現地体験。
男性 33 名、女性 31 名のほぼ半々でした。多くの方は、ボランティア初体験でしたが、アフガニスタン、インド、フィリピン、障害者などの支援活動に長く関わってこられた方々も。
主力は、６０歳前後の方々でしたが、１０代、２０代、３０代、４０代、もちらほら。大学生、講談師、アメリカ人、中国人の「語学教師」などもおられました。
それにしても、基本は、「早朝出発、深夜帰還」の日帰り強行軍。ハンドルを握る方のほとんどは、６０才台。タフでした。皆、元気で、交通事故も無く、無事でなによりでした。
一応、全て「私」の友人・知人とそのまた友人・知人の拡がり、とはいえ、64 名中 42 名が、私にとっても、「初めまして」のご挨拶。殆どの参加者は、バザー終了後のドライブインで、「初めまして」の自己紹介。５回全てのバザーに来た２人始め、４回、３回、２回とそれぞれリピーターとしてこられた方が多く、互いに顔見知りとなりました。この手馴れているリピーターのスタッフを中心に、現場での配布作業や、交通整理、BGM 演奏、幼児のウオッチング、そして今回の抽選や行列づくりなどに、大活躍。その一部の方は、ご自分のブログなどで、バザーや被災地の写真にコメントしながら、発信して頂いた方もあり、またご夫婦での「アウン」の連携での作業も目立ちました。

Ⅱ　2012 年への展望―支援物資はまだ必要か―

私の周囲の方々からも、よく「テレビでも、仮設住宅に商店も出来たり、皆、見た目は小ざっぱり。もう、支援物資って必要ないんじゃない？」という声が良く聞かれます。また、タダで貰う支援慣れは、「自立を妨げるので、無料配布は止める時期」などと言う方もおり、行政でも２年間の仮設住宅で自立を促す方向。さらに、今回でバザー終了、支援物資送付終了、を

「やはり、そろそろ十分なのね。」と錯覚される方々も。一方で、今月に入っても、お電話やメールで、「本当に支援物資を送らなくて良いのか？」「支援物資を送りたい。××や〇〇なら、必要では？」などのお問い合わせも相次ぎ、さて、どっちなのか、現地に行くと、復旧、という言葉が、「旧態に復する」というならば、それは、絶望的なほど、遠い世界の話に見えます。少なくとも、私たちが行った宮城県の南三陸町から山元町までの広域の津波被害を受けた海岸線地域の殆ど全てで、ようやくガレキ撤去が終わり、ダンプが通る道が整備され、工事用の電柱と、一部信号機が付いた程度。一言で言えば、写真でしか見たことのなかった戦時中の爆撃跡の荒野、全く「復旧」されていません。そもそも「自立」とは、まず経済的な自立があってのこと。それには、事業と雇用の復旧、復興があって初めて論じられるもの。確かに、意欲ある一部の被災者は困難に立ち向かい、またはネットなども駆使し、新たな事業展開を模索し始め、メディアにもとりあげられています。それでも、多くの被災した漁港の水揚げは、昨年の１％、とか多くて半分。亘理のいちご、も、まだまだ僅かな収穫です。ただでさえ、全国に生活保護世帯が２０５万人、完全失業者が、２７５万人のご時世です。失業者対策での町の臨時雇いなどのアルバイトも、そろそろ終了。雇用保険の延長も打ち切られ、来年１月からは、今回の災害での失業者への雇用保険給付も打ち切られ始めます。また、自分の家庭で食べるだけの野菜や米を耕す日々のご老人たちに、「復旧」「自立」とは、最低でも、「耕作地」を与え、体を動かす環境を作ることです。まして、ガス・水道・電気・鉄道などのインフラすら、「復旧」出来ていないのに、早くも「支援不要＝自立化・自己責任」の風潮が出始めていることを危惧します。ファイナンシャルプラナーである私から見れば、被災者の方々と話をしていても、「収入と支出の計画」のアドバイスは殆ど出来ない状態。支出ばかりで、収入が見えないのです。「心」も、「復旧」どころではありません。過去の喪失感だけなら、時と共に癒されることもあるでしょう。しかし、「生きる希望」「夢」どころか、一寸先が闇、で、「不安」は、時と共に増幅しているように見えます。毎月のバザーでも、円満だった夏頃より、段々と全体の雰囲気が苛立って来ており、寒い冬を迎えるからだけ、とは思えません。ここに来て、報道でも、「自殺」が相次ぎ、問題になってきています。喪われた人や失った家屋、コミュニティ、仕事などは、過去の問題でなく、ローンも二重、三重苦となって、今後の希望を失わせ、「生きる気力」の喪失が目立つ時期になってきたのです。今回のバザーで、宮城県で長くストックしていた支援物資の一部が配られました。これまで配られなかった理由は、いつも同じ。支援物資がいらなくなったのではありません。「公平の原則」。つまり、宮城県全部の市町村や、「仮設住宅」に配るほどの量でなく、不公平になるので、数が揃うまで、配れなかった、ということで、亘理町の中央体育館には、先月も「山のような支援物資」が積まれていました。今回、その一部が、亘理町の規模程度の量、ということで配布されることになった、ということ。配らないで捨てられるよりは、よほどマシな「不公平」ですが、行政は、細かな個々のニーズには対応しません。その外郭団体のような「社会福祉協議会」も、一部地域（石巻など）を除き、行政から決められたことをやるだけの事務的・下請け的存在、で、民間ボランティアとの連携も、さほど上手く行っていないようです。

そこで、２０１２年の我々「３１１　有志」の課題、を確認します。

①　「長期間の無料支援物資の配布はまだまだ絶対的に必要」

被災者の方々から聞いた暮らしぶり、とニーズの高い支援物資の品目などから判断して、です。

貰って当たり前の「不遜」な態度、に見えたとしても、支援の要・不要、とは関係ありません。

そして、行政の支援物資の配布の多くは、「仮設被災者」へのみ、で、「在宅被災者」には行き

届かず、かといって「仮設被災者」は潤沢な物資があるのか、と言えば、暖房対策すら不十分で、

隙間は大きく、民間ボランティアなどの「物資配布」のニーズは確実に存在します。

②　「首都圏始め、支援したい方々は、大勢いる。」

今回の上記支援者の皆様は、まるで、枯れ草に火をつけるような拡がりで増えていきました。「募金だと、何に使われたのか、分からない。現物を知っている人たちが直接被災者に渡せるから、ささやかでも参加したい。」という意思を持った方々のいかに多いか、です。

そして、いまだに、ひきも切らず、「支援物資はまだ間に合いますか？」のお問い合わせ。

③　「この５ヶ月間の成果から、組織対応を学ぶ。」

まず、なにより、現地の手引き、主催者があってこそ、の成功でした。我々首都圏などから「支援物資送付」は出来ても、「無料配布」は出来ません。ですから、ボランティアの主催者グループ、及び、今回の企画を教えてくれ、また地域広報してくれた災害 FM 局への感謝の気持ちは、忘れてはならないことです。逆に、「最大の支援物資供給元」となり、被災者や主催者の、現地のニーズによって、臨機応変に品目を絞り、また、「最大のバザー支援要員部隊」として、主催者から我々の存在が感謝され、連携できたこと、が「成功の要因」でした。また、「友達の友達」というクローズな世界での仕組みで、ブログやネットでの、見も知らぬ方々への呼びかけはしないこととしました。支援物資の送り手も、一定の「信頼関係」と「同じ志ざし」で結ばれていたからこそ、の成功でした。

④「２０１２年に何を引き継げるか」

さて、そこで、せっかく知り合った大勢の仲間のパワー、2011 年でオシマイ、では「モッタイナイ」。そこで、まず、何が出来るのか、今回参画された多くの皆様の声を聞き、今回の支援構造であった、「友人・知人とその繋がりの範囲で、現地に行く行かないは自由で、大きな力に変える」コンセプトをベースに企画を練ります。

別に、何かのアテがあるわけでもないので、「ゼロ回答」もありえますが、空想に終わらせず、

「何か」が出来るといいな、と思います。

具体的には、来年１月中に、東京のどこかの会議室で、皆様の意見や提案も頂きながら、２０１２年の「３１１　有志」という「烏合の衆」の「勝手連」が動き出す「スタート」が切れれば、です。（齋藤）